

子どもの心に育む喜びの花

－「保育内容と指導法（表現）」への試みとして－

土 田 定 克*

The Joyous Flowers Nurtured in Children's Hearts

－ An Essay on a New Way to the Contents and the Instructions for Childcare.

Sadakatsu Tsuchida

今年度、歌への導入から展開までを「指導案」に書いた上で先生役の演習をすることを授業内で新たに試みたが、それは学生の学習意欲の向上へと繋がった。子ども達の未来について考えるとき、保育の楽しさとは表面的な楽しさだけでは充分ではない。広く深い楽しさ、知的かつ創造的な楽しさが遊びや活動の中に含まれているとき、保育現場をより豊かな実りある土壌へと変えていくのではないだろうか。第62回日本保育学会で講演された野村萬斎先生のお言葉にある「型」の中に生き方を、「負荷」の中に楽しさを、「序」の中に導入を透視し、育児・保育の研究を通して明らかになる人生の深い摂理に触れる。

キーワード 指導案、芸術的感覚、必然性、楽しさ、生きる喜び

【目的】

子どもにより良い保育環境を整えるためには、その最も大きな人的環境である保育者の質を向上させなければならないことは周知の通りである。「保育の質向上」という時代の要請に対し、それに応える教育法を試行錯誤しながら常に改善していくことが目下の課題である。そこで今年度の授業において試みたことを基に、子ども達と分かち合う「楽しさ」とは如何にあるべきか、また表現の種である芸術的感覚を如何にして養えるかを考える。保育を志す学生の持つ素晴らしいものが最大限に活かされるような教科教育法を追究することが本稿のねらいである。

【方法】

今年度、保育科1学年を対象とした「音楽IA」の授業内で新しい課題に踏み込んだ。「保育内容と指導法」への試みとして、指導案の書き方を取り入れたのである。指導案は2学年の「保育計画論」において専門的に学ぶようにカリキュラムが構成されている。しかし近年、現場から寄せられた高度な要望に応える必要が生じ、「保育計画論」担当教授のご協力のお陰で、「音楽IA」においても微力ながら指導案に触れてみる事ができた。

方法としては例年「音楽IA」（受講生数・約120名。1クラス約40人×週3コマ）の授業内で行っていた発表に広がりを持たせる形を取った。従来この発表は各学生が自由に子どもの歌を選曲し、皆の前で先生役の演習をするというものであった。選曲のみならずピアノ伴奏の有無も、暗譜への挑戦も、全て自由という容易な課題であった。しかしこのような条件は多くの学生の意欲を高める力に欠けていた。

そこで今回はまず指導案の前例を示し、援助者としての視点の持ち方や言葉遣いなどの基礎

* 尚綱学院大学女子短期大学部 講師

から書き方の説明をした。十分な説明ができたとはいえないが、子どもの歌をメインとする「導入から活動の展開までの指導案(10分程度)」を創意工夫して書いてくるよう学生に課した。提出された指導案に修正や助言を加えて返却し、その中で思い描いたことを元実践してみるという発表(試験)に展開させた。学生の意欲を引き出すための方法の一つとして、条件を例年よりも高くしたので以下に記す(下線部は従来との著しい相違点)。

【条件】

- 曲の選択について。教育者として子ども達の心身の健全なる成長に貢献できるような曲選びをすること。手っ取り早い効果を持つキャラクターやアニメなどの題材を完全には否定しないが、その楽しさの浅薄さから授業内ではなるべく避けること。
- 導入を深く考えること。冒頭の質問は全員が考えられるようにし、最初から疎外感を感じる子どもを出さないこと。幼児に身近な生活の中から会話を提供し、導入と活動に深い関連性を持たせること。活動のキーワードを子ども達のほうから「○○!」と叫び出せるようにすると繋がりに無理がない。導入で手遊び・絵本・紙芝居・ペープサートや手袋人形などの児童文化財を積極的に活用すること。
- メインの活動は子どもの歌とする。必ずピアノを用いて弾き歌いをし、暗譜で伴奏をすること。前奏と歌い出しの掛け声、及び後奏を付けること。

【結果】

凡そ以上のような条件を提示した。学生にとってはやや厳しいハードルかと思ったが、驚くべきことに、予想を遥かに超えた熱心な取り組み様と工夫された発表の数々によって試験時間が足りなくなり、あるクラスでは16回目の補講を入れるよりほか打開策がなかったほどである。説明の至らなさもあり、初めて書いた指導案は初歩的なものが多かったが中には既に光るものもあった。先生役の発表の時、ピアノ伴奏が止まってしまった学生が数人いた。しかし見事に全員が暗譜で弾き通したことは、昨年まででは有り得なかった水準である。特に「導入」は多彩にして面白かった。ある学生が「七夕物語」を手作りで紙芝居にしてきた。その絵の美しさに皆引き寄せられて話の中に溶け込んだ。悲話を観終えた後、「たなばたさま」を斉唱した時には喩えようのない臨場感と一体感が湧いたのであった。「こんなにもこのメロディーは美しかったのか!」と私自身も初めて体感し、震えるほどの感動を味わわされたのである。手作り紙芝居はその技術的側面から見ても高度な児童文化財であったが、しみりと皆が一つになって歌った体験は多くの学生に感銘を与えたようであった。実は「たなばたさま」の曲は演奏上さほど難しくはない。この曲を選んだ学生は他にも沢山いたのである。しかし誰もが、その多くの時間と心を込めて手作りされた紙芝居の導入と比べてしまうと、他の導入はそこまで歌いたい気持ちにさせてくれなかったことを、彼らは幼児役をしながら実感したのである。他にも注目に値した発表は何件かあった。「めだかの学校」の絵を見せて、幼児役達の「次はこうしたい」という気持ちを上手に汲み取りながら、一人一人が作っためだかの子達を徐々に学校に貼り付けていく設定は、進んで歌いたくなる気持ちを引き出していた。他にもペープサートの蜂の泣き顔を見せてどのような表情かを問いかけ、悲しんでいるのはお腹が空いているからと伝えて憐れみの情を呼び起こし、それでは皆で折り紙を使ってお花を作り、蜂さんが蜜を吸える花畑を作りましょうと展開して皆で作った色彩豊かな花畑を黒板上に拵えた。泣き顔の蜂が裏返り、喜びの笑顔を見せてくれたところで「ぶんぶんぶん」を歌うなど、さすがが未来の保育士、心の機敏を察し叙情性の豊かな学生もいて感心した。このような楽しさは、子どもの

主体性を重んじつつ情操を育む上での大きな土台となるのではなかろうか。

その一方で、人前に立った経験の少なさから話術・声量・表情などに課題のある学生や、準備段階における創意工夫が足りない学生も見受けられた。それらも含めて発表中に気付いた点を指導案の裏に書き込んで私からの助言として渡した。

発表終了後には、実習日誌の際にも役立つように「感想と反省」を書き込むように促した。「指導案を書くのが難しかった」は多かった。他に「この試験がとってもウツでした。ピアノも初心者で、みんなの前で保育者役ということにとっても恐怖を感じていました。ですが苦手なピアノは猛練習で、導入はイメージトレーニングであつという間にテストを済ませることができました」という感想があった。こちらとしてもこの課題の難しさを充分認識していただけない、ウツや恐怖感からも立ち上がって猛練習に向かった姿には実に頭の下がる思いがしたものであった。「友達の発表を見てもう少し自分も真剣に取り組めば良かったと思った」という内容や「導入の大切さを痛感した。友達のアイデアで良かったものはメモしたのでこの試験で終わらせず、これからも導入を考えていく材料にしたい」など、学生たちにとって同年齢の友達による発表から受けた刺激は大きかったようである。

【考察】

未来の保育士を目指す学生諸君に早期から自分達に差し迫った課題に気付いてほしいという願いからこのようなことを試みたが、以上の実践を通して学んだのは学生だけではなかった。

表現活動において造形と音楽を同じテーマで結びつけることがこれほど効果的になるとは思ってもよらなかった。順番としては歌→造形よりも、造形→歌の方が流れ易いように感じた。造形では物を使うため、創作中に他人との境界線が残る気がするのに対し、歌においては同時に声が溶け合うことにより、より密に周囲との一体感に達する喜びがあるためである。最初に造形を用いて個人単位で創作することにより、個々人の世界と一人一人の存在意義が尊重される。その上で、出来上がった作品を一箇所にまとめることにより、皆が集まったときに醸し出される色彩豊かな全体像を眺められる。その眺めは、みんな仲良しという感覚を無意識のうちに印象付けるのである。そしてあたかもその印象を裏付けるかのように皆で同じ歌を歌う。仲良しだから一緒に歌う、仲良しだから共にいる。日頃つい出てきてしまう我、つい喧嘩してしまったあの子、そういう日常生活で生じた他の子との境界線はこのように視聴覚を通して感覚的に薄められ、皆が一つという安心感と共に歌う喜びが友情の育くみを助長すると考えられるのである。

絵の大切さについては、同じ内容の絵本を取ってみても画家の描き方一つで全く印象が変わる事実に注目したい。児童画家で最も音楽的な画家の一人はいわさきちひろである。彼女の絵の繊細さ、大胆な構造と色使い、空間の美、そして背景とのバランスの中に描かれた登場人物の心理が絵に深みを与え、見るものに印象の幅を与えているのである。今回の発表においても、色に対する意識を研ぐよう指導した。歌詞を書く模造紙を白にした学生が多かったが、白は形式的な色である。子ども達に何を伝えたいかをよく考え、歌う曲の内容に合わせた色選びが大切である。例えば「南の国の大王」では背景に黄や橙を使った方が暑さを演出できよう。南国といえば海だからとばかりに水色を多用しても、子ども達には暑さよりも涼しさの方が目に飛び込んでくるのである。言葉を感覚的に覚えていく子ども達の発達援助を考えるのならば、このようなことは細かくても保育者の工夫一つでずいぶんと変わり、活動を通して得られる知性や感性に差異が生じてくると思われるのである。他にも事前準備の不首尾や、歌詞サイズ・文字

色に不適応なミスが見受けられた。左右の逆行など、子ども達の前で行うことの持つ特徴を熟知できるよう少しでも多くの場を与え、現場に行ったときに役立てられるような指導が必要だと痛感したところである。

保育科の学生にとって歌伴奏の暗譜は至難の業である。しかしこれも人前に立つことを念頭に置いたとき、学習中に鍛える方が賢明なのではないだろうか。覚えるまで身に付けたものは事故の際に本人を救うからである。暗譜も含め今回は高いハードルを課したが、超えた学生もそうでない学生もこの基準を超えようと努力したことによって自身のノルマが高まったように見受けられた。自身のノルマが高まれば、自己に求める水準が高まる。その弾きこなしした曲と同じ水準を他の曲においても無意識ながら求めるからである。これが「一芸に秀でた者は多芸に通ず」に通じる理なのではなかろうか。

I 表現活動の必然性

指導案において「ねらい」を明確に把握している学生は、その内容全体が引き締まったものであった。また曲想や歌詞の意味を十分に読解し、歌の内容を深みから捉えている学生は決まって導入が冴えていた。ある学生が「バナナの親子」の歌をメインとした面白い導入と展開を考えてきた。バナナ親子の人形を用い、バナナの国に皆で行きましょうと誘い、おまじないの掛け声と共に全員でジャンプして南の国に一瞬でワープするというものであった。そこですっかりバナナ親子と共に南国を楽しみ、歌も練習して、バナナ親子とさよならした後で再びワープして教室に帰ってきた。そこで初めて今度はピアノに合わせて先ほどの体験を思い出しながら「バナナの親子」を歌い、歌い終わったら皆でおやつのバナナを「いただきます」という、アイディアの豊かな設定で皆が心から楽しんでた。これだけ視聴覚から多くの素材を与えられてバナナのことを思い巡らした後に頂くバナナの美味しさ（味覚）は、ありがたみといい、そこから感じ取れる味わいといい、必然的に変わってくると考えられるのである。このように活動の運び・繋がりに必然性が持たされていることが表現活動を楽しくする秘訣である。先述した泣き顔の蜂を喜ばすために作った折り紙の花畑、どんぐりの父の誕生日を祝うために皆で歌った「どんぐり」など、歌うという行動に明確な目的があると子ども達も率先して歌いたくなるのである。「誰かのために歌う」「誰かを喜ばせたいから作る」という様な、良い目的の生み出す表現性は大切である。それは子ども達に思いやりの心を育み、貰う喜びよりも大いなる与える喜びを学ぶ機会となるのである。単に自分達の楽しみのためだけでなく、対象を思いやる情操を育むきっかけとなるのである。明らかな必要性に誘われて意欲が湧き、この気持ちを伝えたいという欲求が生まれる。その内なる気持ちを表に現して、相手に届けて共に喜ぶことが表現することの醍醐味ではなかろうか。表現するということは、「気持ちを贈る」ことではなかろうか。文学・音楽・美術の分野を問わず、優れた芸術作品でさえこの様な気持ちから湧き出たものたる証しとして、しばしば「敬愛なる〇〇に捧ぐ」等と刻印されているのを目にされることがあるかと思うが如何であろうか。

II 「楽しさ」への提議

子どもの表現活動を考えるとき、楽しさが求められていることは論を待たない。楽しいから

こそ、やってみたいという意欲が生まれるからである。そこで、子どもの表現活動における楽しさについてもう少し掘り下げて考えてみたい。

R. シュタイナーはその著作『教育と芸術』のなかで、幼児期における芸術的感覚を養うことの必要性について説きながら「芸術的感覚は真剣さの中に楽しさを生み、喜びの中に明確な性格を作り出す」と述べている。また「子供の場合、『遊び』は行動への内的衝動の真剣なあらわれなのであって、行動の中にこそ、人間存在の真面目が存在しているのである」とした上で、「遊びが生命の唯一の心的内容であった頃に子供が遊んだあの真剣さを持って学習に向かうという感覚を、子供の中に目覚めさせることが教育実践あるいは授業実践の理想である」と述べている。つまり、子どもの遊びは内的衝動の真剣な現れという見方と、真剣さの中の楽しさという感覚を指摘している点が注目し得る。ここで言う真剣さの中の楽しさとは何であろうか。それはちひろが描いた子ども達の眼差しの中に見て取れる。平たく言えば真剣に取り組む際の無心の状態を指すのであろう。芸術の技で言う、集中力と脱力の一致であろう（後述の「型」参照）。

さて、私達は子どもが楽しさを感じているのはどのような時であると考えているだろうか。遊びに没頭しているときか、可笑しくて笑っているときか。「保育は楽しい」「楽しくなければ保育じゃない」と言われるように、子どもたちが楽しむためには保育者自身がまず楽しむことが大切なのは周知の通りである。しかしその楽しい保育が、時に紋切り型の楽しさや通り一遍の楽しさで間に合わせることによって、子どもたちが遊びや楽しさの本当の広がりに出会うことを我々が制限してしまうことがないだろうか。子ども達に楽しさの広がりを提供するためには、我々は楽しさの種類と質について、常日頃から十分に吟味していなければならない。楽しさの中には、笑って可笑的「軽やかな楽しさ」もあり、創造する楽しさのような「深みある楽しさ」もある。そのどちらも子ども達にとってバランスよく必要なのではないだろうか。情緒の安定、心身の発達、情操の深まりを得られるような楽しさは、子ども達の心の糧となるのみならず保護者にも安心をもたらす保育になると考えられる。楽しさに広がりや深みがある時、子ども達が生きることの素晴らしさや喜びを感じ、自然と思いやりの心が芽生えるような園庭となるのではないだろうか。我々は娯楽に比重を置きすぎた“楽しい”保育、安易な保育に偏らないように気をつけたいところである。如何に小さな子どもとはいえ、一人一人が立派な力、未来を築いていく大きな希望を持った子ども達である。大人も子どもも共に成長し、人として生きる生命を温かく見守りながら、育児・保育を通して子どもの心に喜びの花を咲かせられたらと思う。

Ⅲ 「型」と^{ふか}「負荷」

以上の如く「楽しさ」を追究していた折、今回の新しい試みへの啓示的役割を果たしたのが2009年5月に開催された日本保育学会における一講演である。それは、国の重要無形文化財総合指定者・狂言の野村萬斎先生による特別講演であった。一言一句、鋭い知的探究心と確かな舞台経験から滲み出たお言葉で斯様な講演を拝聴できたことに深く感謝したものである。師のお話の要点は以下の二点に絞られよう（括弧内は筆者による補足）。

・型を教わることは没個性にあらず。むしろそれは自己表現するためのプログラムをインス

トールするようなものである。(表現するためにはプログラム=基礎的な土台を必要とする)

- ・子どもに^ふ荷^かを与えよ。(幼児期からの鍛錬が、壁を乗り越える力を育む)

野村先生のご講演は幼児期にご本人が授かった厳しい稽古のことや、現在ご自分のご息や保育施設の子ども達に伝授されている師の教授法について、ユーモアや技の披露を交えながらの内容濃きものであった。目ではなく胸で見る「月見の型」、3歳から習い始める「猿の型」などの披露を通して、型を教わることの意義を説かれた。残念ながら最近では型と聞くと没個性と感じる人が多い。しかし型は安易に個性と対峙するものではなく、むしろ個性を磨き、個性を映し出す鏡である。型とは歴史の中で淘汰された智慧が、一定の様式美に凝縮された格調高い文化である。型は生命なき形式ではなく、逆に絶妙なる力の配分であり、究極的には命を活かすための黄金率である。型の中で余分が省かれ、集中力と脱力とが一つになるのである。現代は個性のみが重視される傾向にあるが、個性とは型という器の中から現れる中身(内容)なのではなかろうか。型を守る中にも溢れ出てくるもの、それが個性である。

その型を学ぶ上で不可避なる「負荷」についてのお話があった。野村先生は負荷を「笑い」や「泣き」の型の中で披露して、圧力に耐えて爆発に向かう力学を狂言の世界から説明して下さった。光の圧縮による発火や原子力のように、これは全てのエネルギーに通じる法則である。したがって生命力という観点から見た場合、人は負荷を耐え困難さに立ち向かっていくときに、結果として最高の楽しさを得られるのではなかろうか。シュタイナーの述べた「喜びの中の明確な性格」とはこのことを指すのではないかと思われるのである。全ての遊びが内的衝動の真剣なあらわれである子どもにとって、遊びの意味するところは幅広い。真剣に遊ぶ子どもにとっては、負荷もが創造的な遊びの一部に含まれていくと考えられるからである。そこに先述した「楽しさ」の広がり^と深みがあり、感覚を洗練して育まれる豊かな表現力、強いて言えば生命力の源があると思われるのである。負荷は何も学習的なこととは限らない。例えば外で思いっきり体を動かして遊ぶ活動があるでしょう。その中でも、時と場合によって負荷を加減できるのである。今日は何も考えずに思いっきり遊ぶのもよし。別の時は遊びの中に解決を見つけられるようにしてアンテナが働くように遊ぶのもよし。重い負荷もあり、軽い負荷もある。いずれの場合も、その時の風と子どもの状態を如何に深く汲み取るかが重要な判断基準となってくるであろう。

IV 今後の課題

保育における表現活動とその芸術的感覚について考えるとき、最後に触れておきたい事として倉橋惣三の論説『幼児保育の芸術性』が挙げられる。保育の真諦を問い続けた彼が、保育の最も大切な要素とはうっとりした境地、すなわち「芸術性」だと論じていることは実に興味深い。倉橋は保育における学問性、社会性、教育性という諸側面の必要と重要を十分に述べた上で、これら全てを包括し積載し糾合する、もっと大きく広く深いものとして保育の「芸術性」を掲げている。芸術という言葉に包まれる本質の所以である。そして「幼児保育者とは最も純なる人間芸術家である」と結論付けた。ここで言う芸術性とは、換言すれば愛であるとも言つて良い。本稿において型や負荷の助けを借りて芸術的感覚を養い、真の楽しさを見出す方法に

ついでに論じたが、その芸術的感覚をどのようにして純なる芸術性にまで高められるかについては、まだ力の及ばなかった今後の研究課題である。

翻って、本稿による保育における課題とは、幼児達が自分たちの型、すなわち生き方を学んでいけるように配慮することではなからうか。お返事やご挨拶をきちんとすることも一つの型である。保育士は人生を歩み始める子ども達はその生き方を学んでいけるように、自身の背中を通して教え諭す教師なのである。子ども達に生き方を教えるとはどういうことであろうか。色々と挙げられるがその底辺は感謝と反省を学ぶことに尽きると言えよう。「ありがとう」と「ごめんなさい」である。素直な心である。宗教でいう祈りの心である。ごく当たり前のことだが、これが一番難しいのである。そのように保育士の責務は大きくて大変ではあるが、「この世に母の喜びほど大きな喜びはない」という言葉にもあるように、保育士はその大きな喜びに肖れる幸せの中にいると言っても良いであろう。母の喜びが祈りとなって詠われた歌を歌詞のみ引用する。本稿の核心と今後の課題にも繋がるため、読者の脳裏に旋律も響くと幸いである。

わらびがみ
童神
～ヤマトグチ～

古謝 美佐子 作詞
佐原 一哉 作曲

- 一、 天からの恵み 受けてこの地球に
生まれたる我が子 祈り込め育て
イラヨ－ハイ イラヨ－ホイ
イラヨ－ 愛し思産子
泣くなよ－や－ ハイヨ－ ハイヨ－
太陽の光受けて
ゆういりよ－や－ ハイヨ－ ハイヨ－
健やかに 育て
- 二、 暑き夏の日には 涼風を送り
寒き冬来れば この胸に抱いて
イラヨ－ハイ イラヨ－ホイ
イラヨ－ 愛し思産子
泣くなよ－や－ ハイヨ－ ハイヨ－
月の光浴びて
ゆういりよ－や－ ハイヨ－ ハイヨ－
健やかに 眠れ
- 三、 嵐吹きすさむ 渡るこの浮世
母の祈り込め 永遠の花咲かそ
イラヨ－ハイ イラヨ－ホイ
イラヨ－ 愛し思産子
泣くなよ－や－ ハイヨ－ ハイヨ－
天の光受けて
ゆういりよ－や－ ハイヨ－ ハイヨ－
天高く 育て

おわりに

以上が保育の質向上に向けて、自らの教育上の改善点を探索し実践を試みたことの報告、及びそれに基づいた考察である。

この研究を通して最も強く痛感したことは手作りの貴さである。手作りは、時に負荷であるかもしれないが導入そのものであり、その過程において心がこもるものである。手作りで料理をしている最中に、傍にいる子どもがまな板に当たる包丁や野菜を炒める音を聞き、漂う湯気に旨味を嗅ぐ。ここに食べるという行動に向かう導入があるのである。導入は人に行動への意欲を促す。語らずして導くのである。楽しく食事を頂くためには手作りで料理をし、楽しく表現活動をするためには手作りで「導入」を練ることが始まりであろう。手作りこそ諸芸術の出発点であり、優しさの表現である。子ども達は衣食住だけでは充分でなく、愛を浴びて成長するのである。

保育の研究をしていると、人生の根源的な部分に触れることが多い。今回の研究材料であった指導案の中にも人生の摂理を垣間見ることができる。野村先生は、狂言でいう「序破急」とはエネルギーの移行を示すものであり、単なる形式ではないと仰った。曰く、序破急とは「波の動き」である。序で溜めたエネルギーが最高潮に達し、破→急の勢いとなって現れるのである。したがって序はエネルギーを温める部分であり、その中味が破急の方向と勢いを決定付けるのである。このことを人生に当てはめて考えれば、たくさん吸収する子ども時代とは人生全体の序の部分である。序である子ども時代にエネルギーを蓄えることが、後の破急、つまり青年～壮年期を迎え社会に出て活躍する際の原動力となるのである。

序は別名、導入である。導入における創意の閃きが活動に明るい見通しをもたらす指導案の方式を人生規模に拡大すると、導入たる子ども時代において浴びる光は、自ずとその後の人生を照らしていくと考えられるのである。また指導案で見た導入と活動の繋がりのように、現世から来世に向かう関連ないし必然性があるとすれば、我々の地上における人生行路はあの世へと続いていく責ある序にして導入であるとも言えるであろう。以上のように、導入は指導案の中だけに留まらない。指導案という型を学ぶことを通して命の形を教わり、人生の導入部に立つ案内者として、常にその方角を省察していきたいものである。

教育は、見た目を配慮して今咲く花に終始せず、長い時間をかけて開く花のことも考慮するものである。人間とは本質的に「時」の中で変化していく存在だからである。喜びの花が子どもたちの心に育つことを主の御名によって祈る。保育士養成を通して何が人にとって大事なかを考え、育児・保育を通して何が子どもの心を育むものなのかを見極めていきたい。そして石割桜の力の如く、子ども達の心がやがて天高く伸びて花開き、桃色に微笑みつつ歓喜に与らんことを祈る。その満開の期が、たとえ永劫の時空を待つこととなろうとも――。

参考文献

- 1) いわさきちひろ美術館 編『ちひろ・紫のメッセージ』講談社文庫 1993
- 2) いわさきちひろ『名作えほんシリーズ』全6巻 講談社 2005
- 3) 倉橋惣三『倉橋惣三選集』第4巻より「幼児保育の芸術性」フレーベル館 1967
- 4) 松居 直『声の文化と子どもの本』日本キリスト教団出版局 2007
- 5) 松山祐士 編『精選 日本の歌 120 選』ドレミ楽譜出版社 2007

土田：子どもの心に育む喜びの花

- 6) R. カーソン 上遠恵子 訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社 1996
- 7) R. シュタイナー 新田義之 編『教育と芸術』人智学出版社 1986
- 8) W-J・オング 桜井直文・林正寛・糟屋啓介 訳『声の文化と文字の文化』藤原書店 1991

